

プレゼンテーション教授法についての振り返りと提案

Considering A Presentation Teaching Method and Suggestions

池 村 努*

要旨

プレゼンテーション技術の向上は、学生のみならず社会人になってからも必要となっている。本稿では現在行っているプレゼンテーション授業についての振り返りと、その成果を踏まえた、効果的なプレゼンテーション教授法についてまとめ、今後の授業に対する提案を行う。授業内ではルーブリックの活用、相互評価などのアクティブラーニングの要素を取り入れ、学生にとって効果的な学習内容となるよう工夫を行っている。

キーワード：プレゼンテーション(Presentation)／

プレゼンテーションスキル(Presentation Skills)／ルーブリック(Rubric)／

相互評価(Mutual Evaluations)

I. はじめに

プレゼンテーション能力は大学教育において、また社会人教育においても重要度が増しつつある。しかしプレゼンテーション教授法については、市販書籍などで数多く発表テクニックが紹介されているが、大学の授業向けとしてのものは多くない。プレゼンテーションに関わる研究としては、相互評価手法が中心で、評価に用いるツールの開発が中心となっている。

筆者は2002年度より「プレゼンテーション演習」等において短期大学生対象にプレゼンテーションに関する授業を行ってきた。これらの科目では発表資料作成から、発表、振り返りまでを一連の流れとしてくり返すことで学生にプレゼンテーションスキルを身につけさせてきた。これらの科目を履修した卒業生から「プレゼンテーション能力が身に付いた」、「仕事で役に立っている」等のコメントをもらう事もある。一方で2016年度カリキュラムでは科目の再編が行われ、時間数の制限も予定されている。

本研究は、プレゼンテーション技能の教授法を

明確にし、効果的なプレゼンテーション教授法を明らかにすることを目的とする。これまでの取り組みの中から、多種多様な目的に応じたプレゼンテーションについて検証することで、適切な評価基準の構築を検討する。また、授業におけるプレゼンテーション教授法の確立につなげる。

II. 研究概要

今回の研究は、2005年度から2011年度にかけての「プレゼンテーション概論（1年次前期）」、「プレゼンテーション演習Ⅰ（1年次後期）」、「プレゼンテーション演習Ⅱ（2年次前期）」、「情報機器利用プレゼンテーション演習（2年次後期）」、2012年度から2015年度にかけての「プレゼンテーション演習（2年次前期）」、「プレゼンテーション応用（2年次後期）」における教授内容をもとに分析、検証を行っている。これらの科目は、2005年度カリキュラムにおいては、「プレゼンテーション実務士」資格取得に必要な専門教育科目として開講され、2012年度以降のカリキュラムにおいては、資格取得条件から外し、一般の専門教育科目として開講されている。本研究では初めにそれぞれの科目における教授内容の確認を行い、次いで項目の整理を行う。2012年度のカリキュラム改訂に合わせて項目の整理を行っている

* IKEMURA, Tsutomu

北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科
情報科学

ことから、今回は2012年度カリキュラムの精査を中心に行うこととした。

項目整理に続いて、プレゼンテーション準備から発表、振り返りに至る一連の流れを確認し、振り返りに用いるルーブリックについて見直す。本研究の前段階として、プレゼンテーション授業における効果的な相互評価方法の構築について研究を行っている。同研究では、ルーブリックを用いた評価や、WEBアンケートを用いた評価、記述式の評価表を用いた評価などについて検証を進め、改善方法などについて考察を行ってきた。ルーブリックは2013年度から試験的に導入し、相互評価における確認項目として用いている。本研究では相互評価のみでなく、プレゼンテーション準備から発表、振り返りの中で適宜ルーブリックを用いることができるような提案を行っている。本研究でもこれを引き継ぎ、評価項目として反映する。

本研究で取り上げた科目の過去8年間の履修者数は表1の通りである。カリキュラム改訂後の履修者数が増加していることが読み取れる。これはプレゼンテーション実務士資格を取得するには、4学期にわたる履修が必要だったが、資格取得を前提としなくなったことで要件が緩和され、科目数減少が履修者増加に影響しているものと考えている。

Ⅲ. 授業概要の確認

前述6科目の科目概要について、シラバスに記載された内容に基づいて確認する。2005年度カリキュラムを再構成して2012年度カリキュラムが作

られているため、類似した項目が現れている。

1. プレゼンテーション概論 (2005年度カリキュラム)

1年次前期科目として開講され、プレゼンテーション実務士の必修科目として設定された。プレゼンテーションにおける文献調査整理を中心に構成された。心理学の観点から“伝わるプレゼンテーション”についての学びも取入れられていた。

2. プレゼンテーション演習Ⅰ (2005年度カリキュラム)

テキストに基づいてプレゼンテーション資料作成時の注意点を学ぶ。プレゼンテーションの構成要素や発表時の注意点を演習形式で学び、プレゼンテーションの基礎力を身につける。

3. プレゼンテーション演習Ⅱ (2005年度カリキュラム)

演習Ⅰを発展させ、PowerPointを用いながら演習を進める。資料作成－発表－振り返りのサイクルをくり返し行い、プレゼンテーション資料作成能力を高める。

4. 情報機器利用プレゼンテーション演習 (2005年度カリキュラム)

演習Ⅱを発展させ、発表の様子をビデオ撮影したものを視聴して、自分の発表を客観的に見る機会を設ける。同時に資料作成－発表のサイクルをくり返し行い、資料作成能力を高める。

表1 履修者数の推移 (2008年～2015年)

開講年次	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
プレゼンテーション概論	28	22	13	10				
プレゼンテーション演習Ⅰ	14	14	10	9				
プレゼンテーション演習Ⅱ	8	14	13	10	9			
情報機器利用 プレゼンテーション演習	8	14	11	10	6			
プレゼンテーション演習						15	16	31
プレゼンテーション応用						13	16	25

5. プレゼンテーション演習（2012年度カリキュラム）

カリキュラム改編に伴い、時間数が半減したことを受けて、資料調査・まとめ・アウトライン作成・資料作成・PowerPoint実習・発表・振り返りまでを90分15回の中で実施するよう科目内容を改めた。また聞き手の関心を引く発表となるような手法として、画面構成とパラ・ランゲージについて重点的に相互評価を行うよう取り組んだ。

6. プレゼンテーション応用（2012年度カリキュラム）

プレゼンテーション演習の内容にビデオ撮影を加えて、発表を客観的に自己評価する。他にPowerPointを用いないプレゼンテーションや、自作他演（自分が作ったスライドを他者が発表する）形式のプレゼンテーションを取入れ、さまざまなケースに対応できるような取り組みを行った。

7. 授業概要の考察とプレゼンテーション構成要素の確認

上記のように授業の中にプレゼンテーションの基本的な学びと、応用的な取り組みを取入れてい

る。発表時にロールプレイ的要素を取入れることで、学生の理解が深まったケースも見受けられたことから、今後の取り組みには多様な教授法を効果的に取入れることが必要と思われる。

2016年度カリキュラムでは時間数がさらに半減することが予定されており、90分×15回の中で効果的な授業とするためには授業効果を検討した上で、項目を整理する必要がある。

上記科目で教授していた内容をまとめると、プレゼンテーションの要素は資料作成と発表の二つに分けることができる。資料作成では、プレゼンテーションの焦点を明確にすることと、伝わりやすいように内容をまとめることが重要となる。そのための手順について確認し整理する。次に発表時の注意点についてまとめる。授業内で特に注意して教授したポイントが、非言語コミュニケーション領域である。文章化されたものをただ読み上げるだけでなく、いかに聞き手に伝えるかということが重要であるため、非言語コミュニケーション領域についても確認し整理する。

また資料を作成しただけでは完成ではなく、リハーサルを行った後のフィードバックもプレゼンテーションには重要な要素となる。「ビジネスプレゼンテーション¹」を参考にプレゼンテーション資料作成の手順を図1にまとめた。PDCAサイクルに基づいたフィードバックにより、プレゼンテーションの内容がより良くなることが期待される。フィードバック先は情報収集から発表の技術まで多岐にわたっている。

上記のように、プレゼンテーション技能の教授において、重要な要素を絞り込んだ。次章では要素毎に、現在取り組んでいる教授法と課題について確認を行う。

IV. 教授方法の整理と課題

1. Plan

(1) 主張の明確化

課題を課す際にはテーマと共にプレゼンテーションの目的と、ターゲットを明確にする。プレゼンテーションには「情報を伝える」「説明をする」「説得をする」という三つの目的別タイプがある。始めにこれを明確にすることによって、学生自身がどの様なプレゼンテーションをすべきか

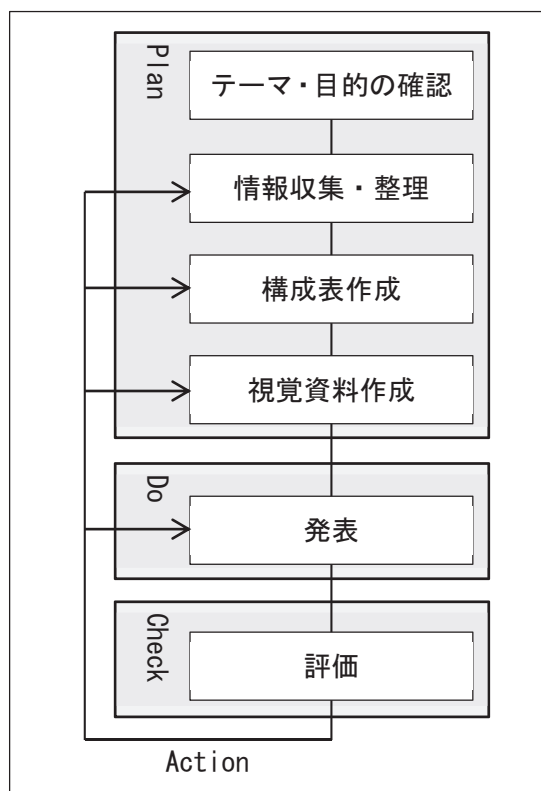


図1 プレゼンテーション資料作成手順

を考え決定することになる。いずれの場合も論理的な説明を心がけるよう指導する。そこで、「主張」「データ」「論拠」について明確にすることが必要となる。主張すべき事柄が決まった段階で、情報収集を行う。

情報収集と整理をする際に、KJ法を用いるよう指導している。関連すると思われる項目についてアイデアを書き出し、グループ化することによって説明のポイントを作成する。さらにPros Cons（プロコン）リスト（図2）を用いることで、主張を補強できるようなデータ作りに役立てる。

	PROS:メリットを記入	CONS:デメリットを記入
要素1		
要素2		

図2 Pros Cons（プロコン）リスト

(2) 構成表作成

情報収集に続いて構成表を作成する。提供している構成表のイメージを図3に示す。この構成表は実教出版『ビジネスプレゼンテーション』を参考に作成した。構成表をまとめる際に、アウトライン構築—本論作成—タイトル付け—結論—序論の順で作成する。アウトライン構築にはプレゼンテーションの流れがわかりやすくなるよう、ストーリーを組み立てる。構成表はプレゼンテーションのベースとなるものであるが、箇条書きで仕上げることで、完全に読むことのできる原稿とにならないように授業内で注意を与えている。これは、手元原稿を朗読しない習慣を付けさせないようにはできる効果もある。発表内容を覚えられない場合、手元原稿を見ることになるが、構成表が発言のためのメモになるため、アドリブを含め対象に合わせた言葉遣いができるような指導をしている。言い回しについては、プレゼンテーションのターゲットとなる層に対して、文脈（コンテキスト）が理解されることを重視する。またターゲットに最適な用語を用いることも重要である。ターゲットとなる聞き手についての設定も欠かすことができない。授業の中では、「大学生」「中高生」

「40代の会社員」など聞き手を設定し、それぞれに合わせた用語や話し方をするよう求めている。演習の中ではターゲット役が学生となるため、完全に配慮できていない。今後の教授法改善における課題となっている。

2015年4月19日

プレゼンテーション構成表

- プレゼンテーションの目的
- タイトル
- 序論
- 本論
 - ポイントI
 - ポイントII
 - ポイントIII
- 結論

図3 構成表

(3) 視覚資料作成

構成表に次いでアウトラインに従い、順番に視覚資料を作成する。授業の中ではPowerPointを利用したもの他に、A4のプリントをチラシに見立て、1対1のプレゼンテーションを行うことなども取入れている。授業内で課した条件の組み合わせ例を表2に示す。視覚資料作成においては、文字のバランスや色彩にも注意を払うよう指導を行っている。文字については手元資料とスクリーン投影資料の違いについて強調して説明している（図4）。スクリーン投影に向かないフォントなどを予め例示し、目的に応じて使い分けるように注意する。プレゼンテーションソフトによっては、テーマを選択すると自動で選ばれるフォントがスクリーン投影に向かない場合もあり、実際に体験させる事で確認をさせている。またアニメーション効果については付けすぎることによって逆に主張が散漫になる恐れがあることから、最小限の使用に留めるよう注意をしている。

表・グラフ・図解を用いることで、視覚に訴えかけることができ、より効果的な視覚資料となる。構成表に従って資料を作成すると、文字情報のみとなってしまうがちなため、ポイントを絞って適切に用いることを指導する。図解の効果として「良好な流れ」「成長」「循環」などの表現について例示しながら適切な用い方を紹介する。またグラフを用いることを主題においたテーマを課題として課すことも行った。一方で、関係のないイラストなどを用いることは、理解の妨げとなるため用いるべきでないことを強調する。「キャラクターが好き」という理由だけでテーマと関係のないキャラクターのイラストを用いようとするのが散見される。そのようなことにならないよう注意が必要である。

表 2 発表の取り組み例

対象人数	形式	作者 - 発表者
1対多 (10名程度)	発表形式	自作他演 シナリオを用いる
		自作自演
1対1	ペアワーク PowerPointを使わない	自作自演

2. Do

(1) ノンバーバルチャネルの重要性

発表で注意すべき点はバーバルチャネル（言語チャネル）とノンバーバルチャネル（非言語チャネル）の使い方である。バーバルチャネルとは書かれた文字そのもののことであり、構成表に記された原稿がそれに相当する。ノンバーバルチャネルとは文字情報意外、つまり文字以外の表情、アイコンタクト、身振り、姿勢、服装、持ち物、話し手と聞き手の距離、その場の雰囲気などが含まれる。その中で特に言語に近い部分を「パラ・ランゲージ（周辺言語）」と呼んでいる。先に触れたように、完全に読むことのできない原稿を用いることで、聴衆への気配りをせざるを得なくなる効果が期待される。一方で、発表内容を覚えられないなどの弊害も考えられる。授業内ではくり返し発表練習を行う過程で、初めは原稿を見ながら発表していた学生も、徐々に原稿に目を落とす時間が減るようになる効果が確認されている。原稿を見なければ自然に視線が上を向き、聴衆とのアイコンタクトが行えるようになる。アイコンタクトの効果は、「自信があるように見える」「話しかけられていると感じられる」などポジティブな要素がある。アイコンタクトについても、一箇所だ

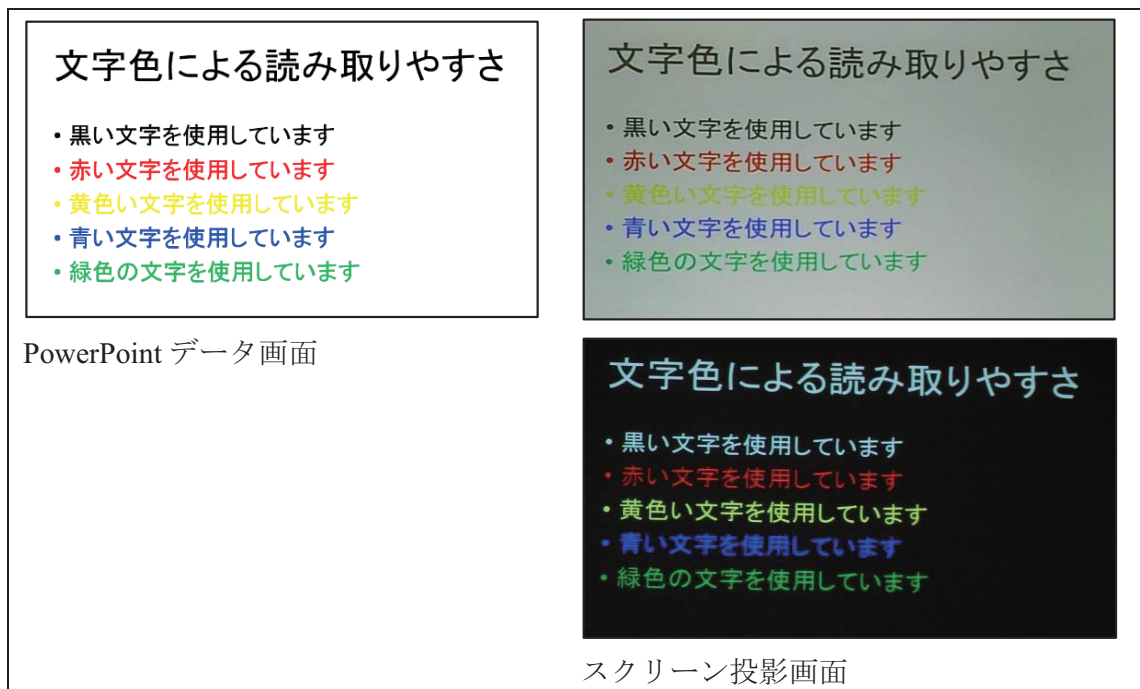


図 4 文字色による読み取りやすさ

けでなくZIGZAG法(図5)で多くの聴衆に視線を合わせるように指導を行っている。

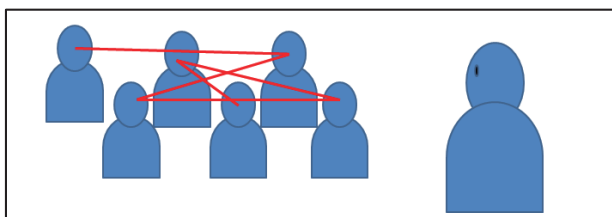


図5 ZIGZAG法

(2) パラ・ランゲージ

次に「パラ・ランゲージ(周辺言語)」についての注意について考える。声の大きさ、声の高さ、話すスピード、話の間・メリハリなどが相当する。発表に先立ち、効果的な発表を幾つか例示し、一本調子にならないようメリハリのある発表を心がける。「はい、わかりました」「ええ、いいですよ」などを例として取り上げ、パラ・ランゲージを強調して話すことで、日常生活で用いているパラ・ランゲージの効果を再確認して発表に臨んでいる(表3)。話の間・メリハリを効果的に使うことで、発した言葉が聞き手の心の中で反芻され、伝えたい内容を強調できる。

(3) 発表スタイル

発表方法についても幾つか実験的要素を取入れている。表2のように、PowerPointを用いた1対多の発表。チラシを用いた1対1の発表。ペアになり他者が作成した指示書に従って1対多で発表するものと、自分が作成した指示書に従って他者が発表するというように、役割を交代して行う「自作他演プレゼンテーション」なども取入れている。PowerPointを用いた1対多のプレゼンテーションは、大学入学までに学習する機会を有する学生も多くいるため、初めからある程度スムーズに行うことができる。しかし、自分が作成

したPowerPoint資料を他者に発表してもらい、または他者が作成したPowerPoint資料を発表する「自作他演プレゼンテーション」の練習機会は多くないようだ。この取り組みにより指示書の作成と、画面切り替えのタイミングや、声の強調などリハーサルを通して準備する機会を設けている。ここでのディスカッションによる学びが、自らのプレゼンテーションにフィードバックされることを期待している。また、聴衆役の学生は、プレゼンテーション視聴時にループリック等を用いてコメントの記入を行うようにしている。ループリックについての詳細は後述する。

1対多で発表を行う際には、一グループが10名以下になるよう調整を行っている。教室環境の問題などもあるが、アクティブラーニングスペースを用いて、2箇所ですべて同時にプレゼンテーションを行うなどの工夫を行ってきた。2015年度は履修人数の増加により、10名を超える状態での発表演習となっている。そのため相互評価の段階において課題が残っている。

3. Check

毎発表後に振り返りを実施する。振り返りには聴衆役の学生がループリック(表4)に基づいた指摘を行う「相互評価(ピアレビュー)」と、発表の様子を録画して後から確認する「自己評価」、自分でループリックをもとに発表を評価する「自己評価」を用いている。

(1) WEBを用いた評価

相互評価についてはWEBアンケートを用いた方法や、口頭での評価、少人数グループに分かれての評価等、幾つかの方法を試している。他大学での取り組みでは、LMSを用いた手法ⁱⁱを導入した報告などもある。WEBアンケートはPCを用い

表3 パラ・ランゲージが与える印象

声のトーン		
文字情報	はい、わかりました	はい、わかりました
声が与える印象 (学生への聞き取り)	喜んでいる やる気がある 肯定的	いやいや答えている 反抗的

る方法や、スマートフォン、携帯電話を用いる方法がある。本学で試行した結果授業環境の影響が大きく、現段階では導入を中止している。明らかになった課題として、視聴直後にPCを使用できる環境が整っていないことや、ある程度の人数を

視聴後にまとめてWEBアンケートを行うと、記述が正確でなくなること、全学生がスマートフォンやタブレットPCを所有しているわけではないことなどがあるⁱⁱⁱ。上記の他に「発表者が一番訴えたかったことが何か」を聴衆役の学生に答えさせ、正確に伝わったか確認するという取り組みも2014年度から試行している。アウトライン作成の段階で、ストーリー性がきちんと形成されていれば正しく理解されて当然とも言えることだが、評価を行った結果、主張と理解に少なからずギャップが生じているケースがあった。

(2) 相互評価（ピアレビュー）

相互評価（ピアレビュー）を行う際に学生に注意していることは、「ここが良かった」「ここを改善すればより良くなることが期待される」など褒める内容を中心に発言させることである。「『ここにも自分を分かってくれる人がいた』『私の良い点を認めてくれる人がいる』といったことから、多くの方は『幸せだな』という感情に浸ることができるのです。その高感度は、相互好感的なものになる傾向があります。」（永崎一則、ほめ方の研究^{iv}）とあるように、相互評価を行いやすい授業環境を構築するため、学生同士は褒めることと改善提案を中心とし、改善提案を述べさせるようにしている。その上で、教員から不十分な箇所や、問題のあるクセなどについて指摘を行い、改善を促す。

ピアレビューは同じテーマで2回行う。その際発表グループを分け、2度目の発表時はグループ内の学生を一部入れ替え、始めて視聴する学生と2度目の視聴となる学生が混在するようにする。混在することで、改善状況の確認と同時に、予備知識を持たない状態の視聴による、分かりやすさの確認が期待される。

(3) ビデオ視聴による振り返り

ビデオ視聴による振り返りは、発表者が意識していないクセを確認するために行う「自己評価」として用いた。ビデオ映像を見ることで、身体の揺れやボディランゲージなどについて客観的に見る事が可能となる。履修者が少人数の頃には振り返りの時間を用いて全員で同じビデオを視聴し、相互にコメントを述べる方法を取入れていた。2014年度以降履修者の増加に伴い、資料作成の時

表4 ルーブリックを用いた評価基準

分類	観点	基準
資料	内容	全てに適切な材料が整っており、要求された内容が記述されている
		材料は十分に揃っているが、記載内容に不備がある
		材料が不十分で、内容に不備がある
	文章構成	文章は論理的な順序で記述され、視聴者は内容を容易に理解することができる
		文章は論理的な順序で記述されているが、部分的に校正不足の記述がある
		不適切な表現や、日本語の文法に誤りがある
	ビジュアル化	図や表、図解などが効果的に用いられている
		視覚に訴えかける工夫がされている
		文章だけで構成されている
発表	発表姿勢	聞き手を意識して発表できている
		聞き手を意識しようという、努力は見られる
		聞き手のことを考えずに発表している
	発声	はっきりと大きく発声している
		声は大きい聞き取りづらい
		語尾がわかりづらい
		小さな声で聞き取れない
	アイコンタクト	聞き手を見ながら発表している
		聞き手を見ているが、すぐに手元/画面に視線が行く
手元の資料ばかり見ている		
画面ばかり見ている		

間を用いて一人ずつビデオ視聴して確認を行っている。

4. Action

(1) 発表資料修正

振り返りを受けて、構成表と発表資料の修正を行う。修正は図1に示したように、資料収集から発表に至る全ての過程に渡る。全体のPDCAサイクルの実施回数を増やすことで、プレゼンテーション資料から発表の流れをくり返し経験し、全体のスキルが向上することを期待している。

(2) 発表方法修正

相互評価、ビデオ視聴の振り返りを元に、プレゼンテーションにおけるノンバーバルチャネルの修正を行う。アイコンタクト、間の取り方、声の抑揚など改善案を次の発表に反映する修正を行う。

5. 現状における課題

資料作成時、十分に課題に対する調査と整理を行わず、すぐPowerPoint作成に入る傾向のある学生がいる。作成時に指摘し、準備に時間を掛け

表5 「プレゼンテーション演習」授業概要案

回	授業概要	説明
1	プレゼンテーション要素の確認	プレゼンテーションの目的となる「情報を伝える」「説明する」「説得する」の違いと、それぞれに必要な技術を学ぶ。
2	構成表の理解	構成表を説明し、構成表を作成するための手順について学ぶ。論理展開、Pros Cons リストについても学ぶ。
3	プレゼン資料のテクニック	発表資料としてのPowerPointを作成する。効果的な表現方法と、避けるべき方法について学ぶ。
4	さまざまな表現方法	プレゼンテーション技術としてのバーバルチャネル、ノンバーバルチャネル、パラ・ランゲージの重要性について学ぶ。
5	プレゼンテーションリハーサル	示されたテーマに基づいて作成した資料を元に、ペアになってリハーサルを行う。資料には表やグラフを効果的に用いていることが期待される。指摘された内容に基づいて次回までに修正を行う。
6	発表1-1	10名程度を一組にして発表を行い、ピアレビューを行う。
7	発表1-2	発表1-1で示されたコメントに従い修正した資料を用いて発表する。ピアレビューにより、発表の評価を得る。
8	指示書を用いたプレゼンテーションリハーサル	指示書を用い、自作他演のプレゼンテーションを体験する。相互に発表のポイントを伝え合い、次回までにそれぞれの改善と発表練習を行う。
9	発表2-1	10名程度を一組にして発表を行い、ピアレビューを行う。
10	発表2-2	発表2-1で示されたコメントに従い修正した資料を用いて発表する。ピアレビューにより、発表の評価を得る。
11	1対1のプレゼンテーション	PowerPointを用いないプレゼンテーション資料について学ぶ。チラシや配布資料など手元資料作成で注意すべきポイントについて学ぶ。次回までに資料を作成する。
12	1対1のプレゼンテーション(発表)	学生は教室内を移動しながら、手元資料を用いてプレゼンテーションを行う。PowerPointを用いないことで、アニメーション効果が利用できない状態で、どうすれば効果的に説明できるかについて学ぶ。
13	最終プレゼンテーションリハーサル	演習内で学んだ内容が網羅される発表課題を作成し、ペアになってリハーサルを行う。
14	プレゼンテーション大会1	履修者全員によるプレゼンテーションを行う
15	プレゼンテーション大会2	履修者全員によるプレゼンテーションを行う
授業外学習		指示に従ってプレゼンテーション資料を作成、修正してくること。

るよう指導しているが、時間的なロスが少なからず生じ、指導上の課題となっている。またピアレビュー時に少なからず何もコメントを発しない学生が散見される。また発言しても「よかった」など具体性に欠ける発言の場合がある。これらを減らし、積極的に発言させることが相互評価の質向上のために求められる。

V. 「プレゼンテーション演習」提案

前節までの通りプレゼンテーション発表に至る要素を確認した。本節では2016年度以降のカリキュラムに備え、90分15回の授業に備えた教授内容の提案を行う。学生は1年次の「情報機器演習B」において、プレゼンテーションに対する学びを終え履修することになる。本科目に期待されることは「プレゼンテーション資料作成を通じて、ツールとしてのPowerPoint活用法と伝える技術の習得を目指す」「コミュニケーションチャネルの正しい使い方について学ぶ」「相互評価を用いて、コミュニケーション能力を高める」ことである。そこで、15回の授業内容として表5の通り提案する。

1. 資料作成時のポイント

表6 チェックリスト案

作成時
資料収集に十分時間を掛けている
複数の材料（ソース）を参考にした
要素抽出を行った
抽出した要素を元にグループ化を行った
アウトラインにストーリー性を持たせた
アウトラインの流れは理解されやすいように工夫した
論理展開に矛盾はない
本論に基づいて結論を導き出した
結論で主張を明確にした
序論の切り出し方を工夫した
リハーサルを行っている
他者プレゼン視聴時
良い点に複数気がついた
良い点を言葉にできる
改善すべき点に複数気がついた
改善すべき点を言葉にできる
相互評価コメント時
コメントを述べた
相手に配慮したコメントを述べた
改善提案を述べた
良かった箇所について明確に述べた

資料の作成が作成手順に従っているかについての確認を、ルーブリックやチェックリストなどを用いて行う。チェック項目として表6に挙げた要素を考えている。学生はチェックリストなどに基づいて自分の作業を確認し、プレゼンテーション資料作成における各ステップを習慣づける。発表のテーマによって資料収集にかかる時間は異なるが、充実した発表内容とするため必要な項目である。また、調査発表などのケースでは思い込みで資料を作成しないよう、複数の情報源にあたることを確認する。

資料作成の順番として、アウトライン構築－本論作成－タイトル付け－結論－序論となるよう注意する。アウトライン構築では、論理展開に注意する。ここでも思い込みによる資料作成が生じやすいため、後述のリハーサルと併せて確認を行う。アウトラインに従って本論を記述し、本論に沿ったタイトルを付ける。結論は主張が明確になるよう、繰り返すなどの強調を取入れる。最後に序論を作成する。本論の予告としての位置づけとなるため、本論から離れないように切り出し方を工夫する。またアドリブを用いて、印象に残る導入についても検討する。以上の項目をチェックする。

2. 視聴時のチェックポイント

他者のプレゼンテーションを視聴するときは、自分の資料作成に反映できる要素を探すつもりで視聴する。良い箇所があれば自分の資料作成に活かし、改善すべき箇所についても反面教師として活かすことが可能になる。常に問題意識を持って視聴することを確認する。

3. 振り返り時のチェックポイント

振り返りにおいても問題意識を持って取り組むことを期待し確認する。視聴した全員がコメントを述べるのが望ましいと思われるが、時間的制約により実現が難しい側面もある。しかしコメントをすることは、「自分の考えを相手に正しく伝える」というプレゼンテーションの本質に繋がる部分である。さらに活発な議論に至れば望ましいが、最低限良い箇所について褒めることと、改善すればさらに良くなる部分について伝えることを

行う。そのさい、相手への配慮を行って発言することが聴衆を意識したプレゼンテーションに繋がる。チェックリストでは以上の項目をチェックする。

4. チェックリストの試行

2015年度の「プレゼンテーション演習」「プレゼンテーション応用」においてチェック項目の導入、及びチェックリストの試行を行っている。新カリキュラムに対応した「プレゼンテーション演習」は2017年度から開始される予定のため、今後2年間の間にチェックリストの改善を行う予定である。

VI. 展望と課題

現行プレゼンテーション授業は選択科目であるが、2012年度のカリキュラム改訂後履修者が増加しており、2016年度のカリキュラム改訂でも履修者が増えることが考えられる。従来は10名程度の授業展開を考えていたが、2015年現在は履修者が20名を越えてきている。履修者の増加は発表機会の減少に繋がる。プレゼンテーションスキルの向上には、くり返しの発表が重要である。発表回数確保のために作成時間を授業外に行うなど、現行の授業展開から変更が必要となる。併せて資料作成の手順を明確にすることで、作成時に自己点検ができ、より完成度の高い資料の作成が可能になると期待される。

現行の評価方法はWEB利用に対する検討が行われていない。評価の簡略化を図る上でWEBの利用は効果的であると考えられる。今後の取り組みの中で、WEB利用についても検討し、改善を行いたい。

〈参考文献〉

- 1) 木村富美子, 学生の相互評価における自己評価と他者評価に関する分析, 創価大学通信教育部論集, 2006, 第9号, 157-172
- 2) 萱津理佳, 情報表現力を向上させるためのピアレビューの試みと評価, 長野県短期大学紀要, 2009, 64巻, 71-79
宮城信, 文智暎, 大学におけるコミュニケーションスキル教育の研究開発, 富山大学人間発達科学研究実践

総合センター紀要, 2014, 9号, 1-11

- 3) 竹田尚彦, 吉田宏史, 佐合尚子 プレゼンテーション演習における学生間相互評価の分析, 情報処理学会研究報告コンピュータと教育, 2005, 36号, 55-62
- 4) 河野昭彦ほか, 学生の相互評価によるアクティブラーニング型授業 (I) -プレゼンテーションの向上を目指す取り組み-, 日本工学研究協会 平成25年度工学教育研究講演会講演論文集, 2013, 482-483
- 5) 森脇道子監修, 武田秀子編著:ビジネスプレゼンテーション, 実教出版, 2011
- 6) 永崎一則, ほめかたの研究, 初版, 早稲田教育出版, 2015
- 7) 長尾裕子, うけるプレゼンの技術が面白いほど身に付く本, 中経出版, 2001
茂木秀昭, 論理的な話し方が面白いほど身に付く本, 中経出版, 2004
- 8) 山本昭生著, 福田健監修, 論理的に話す技術, サイエンスアイ新書, 2010
- 9) 平林純, 論理的にプレゼンする技術, サイエンスアイ新書, 2009
- 10) 山口弘明, プレゼンテーションの進め方, 3版, 日経文庫, 2001

ⁱ 森脇道子監修, 武田秀子編著, ビジネスプレゼンテーション, 実教出版, 2011

ⁱⁱ 竹田尚彦, 吉田宏史, 佐合尚子 プレゼンテーション演習における学生間相互評価の分析, 情報処理学会研究報告コンピュータと教育, 2005, 36号, 55-62

ⁱⁱⁱ 池村努, プレゼンテーション授業における相互評価に関する事例報告, 教育システム情報学会第38回全国大会講演論文集, 2013, 217-218

^{iv} 永崎一則, ほめかたの研究, 初版, 早稲田教育出版, 2015